高校阿倍野新聞

発行所
大阪市阿倍野区阪南町中一丁目30番34号
大阪府立阿倍野高校
新聞部
編集責任者　石井典子　土上典子

文化祭を回想する

目だつ文化クラブの低調
来年は学校祭に？

今年の文化祭を、もう一度考えるためにアンケートをとった。その結果は、文化クラブの衰退化、そして一般参加の躍進、と好対照にあらわれ、またその中において文化クラブの日常の活動の問題などがでてきた。また今年は基本方針というものがだされたが、その基本方針に対する、阿倍高生の認識度の低さ、また関心のなさ、というものを、まざまざと見せつけられた。

今年の文化祭は十月二日（土）三日（日）と開催された。そして二ケ月余り過ぎた今、全校生徒にアンケートをとり、今年度の文化祭についての反省点などを明らかにしてもらった。このアンケート結果によると、全般的に今年度の文化祭に対する印象はあまり良くはなかったという感じであった。ただ一年生は高校生として初めての文化祭だったので、良かったという人が多かった。しかし全体的には、どうも良くなかったという感じである。これはどんな面に問題があるのだろうか。それを考えるために「一般参加と文化クラブとではどちらが活発であったか」という点に対してのアンケート結果を発表したいと思う。結果は圧倒的に一般参加の方が活発であった、という結果が出た。しかしこの結果をうのみにすることはできない。なぜなら、一般参加の性質上、お祭り気分・にぎやかという感じがあるのに対し、文化クラブの展示は、研究発表や日頃の研究成果発表のため、難しくみんなにとっては、とっつきにくいものであることは確かである。しかし、文化クラブが不活発に終わった原因はそれだけではないと思うのである。はっきり言えることは、文化クラブの展示における〝マンネリ化〟ということ。なにか今の現状を見ると、文化祭の為に文化クラブの日常の活動の問題なものにしろ、と言うのではない普段、日常の活動をこつこつやっていかねばならないということを言いたいのである。そうでないと本当の意味での文化クラブの活動がなくなるのではないのだろうか

さて次に文化部会の出した基本方針についてであるが、アンケート結果によると、ほとんど沿って しかしそれにもまして、全然基本方針を知らなかったという人が、非常に多かった。一体これは何を意味するのだろうか。基本方針はあくまで文化祭全体を貫く、いわば全体テーマでなければならないはずのもの。ところが、現実はそうではなかった。では何故こういう結果になったのだろうか？それは阿倍高生の大半があまりにも無関心であったということである。基本方針の承認をクラスで採っているはずである。だのに全然知らないというのはやはり、基本方針なんてどうでもいい、という考えがあるからではないだろうか。だが原因はそれだけではないと思われる。つまり基本方針がどのようにして出されたのか、ということである。基本方針が出されたのは九月中旬。少くとも文化クラブは基本方針の出される前から文化祭の準備をしていたはず。それでは全く基本方針が形式的になってしまっていると言わざるをえなくなる。ある一部のクラブでは、基本方針についていろいろともめたらしい。これもこの辺に原因があるのではないか、と考えられる。

それから最後の文化祭の在り方ということであるが、文化祭の意味から文化クラブに重点を置いた方が良いだとか、一般参加に重点を置けばよいとか、いろいろでていたが、一番多かったのは全校生徒が楽しみ合えるような文化祭をという声が多かった。昔の文化祭といえば全くの文化祭で、文化クラブの展示だけのものであった。しかし現在の世の中の風潮や世論において、だんだんと文化祭の形態が変わってきたことは事実である。学校祭の形にしたり、また文化クラブ主体のものにしたり色々である。ところで、我が阿倍高の場合はどうこれからあるべきであろうか。来年は本校創立五十周年という記念すべき年になり、一部では学校祭の形式になるという情報も飛びかっている。阿倍高生諸君！今年の文化祭を今一度、思い浮かべ、良かった点、悪かった点反省すべき点などを考え、来年以後の文化祭は、一体どうあるべきなのかということを考えてもらいたいのである。

恐喝
―その実態を探る―

本校生が下校時にたびたび恐喝されているので、我がクラブではその実態を調査してみた。

実態　我が校が位置している阿倍野署管内では、昭和46年1～4月末9件、5～7月末10件、8月2件と高校生の被害が出ていたが8月9日に高校生6名と無職2名の計8名（いずれも17～18才）の恐喝グループを押えてからは、11月25日、我が校の一年生二人が被害にあうまで、事件は起こっていなかった。また、発生場所としては、近鉄百貨店を中心とする盛り場、阿倍野筋一丁目～松崎町付近に集中しており時間としては、我々の最終下校時間の5時頃が、警察官の交代時間になっており、そのことを犯人が知ってか、知らずか一番多く発生している。また被害として、金銭（最高六千円余り）及び時計、ペン、殴られるなどが出ている。

ここで、11月25日、午後5時20分頃一年生A・B両君が、苗代田駅に向かう道の22丁目～4付近で制服姿の高校生風二人組に恐喝された現場を再現してみると、『最初呼ばれたが、無視して通り過ぎたところ、少し行った所で二人に前後にはさまれ、「殴らないから来い」と言われ、「どつかれたら損」と思って左の路地へ付いて行った。A君が「金はない」と言ったところ、猫撫声で「どつかれたないやろー」と言われ、「本当に持ってない」と言った。しかし、B君は結局、千九百円とロッカーのカギが入っている財布を取られカギだけ返してもらった。また、「時計を持ってないか」と言われたので、持っていないことを示したが、しばらく後を付けて来た。』ということである。この例でわかるように犯人の手口は、通行中に何か理由を付けて呼び止め、取り囲むようにして、「金を持っているか」と威して金銭などを奪うというのが、一般的である。

対策　まず、金銭的被害を少なくするために、普段は必要以上のお金は持ち歩かないようにし、大金を所持する時は分散して持つようにすることである。また、もし実際に恐喝にあった場合は、取り合わずに避難することが第一であるが、囲まれたりしてそれが出来ない時は、「貸す金はない」などのはっきりとした意志表示をすることが大切である。しかし、身の危険を感じた時は、お金を渡したほうがよいとも考えられる。また被害後すぐに一一〇番に連絡すると、現場にパトカーがすぐ来てくれ、犯人逮捕やもしそれが出来なくても、その付近での第二、第三の犯行を防止することになるから必ず『すぐに』連絡してもらいたい。また、犯人の人相、服、校章ボタンなどの特徴をはっきりと覚えておくことも、犯人逮捕のために大切である。また学校にも忘れずに連絡してもらいたい。

最後にここで、この件に関して阿倍野警察署―少年係の土田主任に、いろいろとお話いただいたことを感謝いたします。

針の穴

明日から楽しい冬休み。時の経つのは早いもの。クラス委員の選挙があってから二カ月になるけどもう大分慣れたかナ？もっとも慣れるにも仕事がないと言う人も…針子、委員会集合の放送が二日に渡ってあったので、なんと後期委員は真面目なんだろうと思ったらあれは、委員が集まらなかったからなんですって。▼ところで、防火訓練は、三分が目標だったのに前回の五分より悪い六分とは、しかし非常ベルの鳴らなかったクラスもあるそうですから。▼十一月は沖縄国会の強行採決やそれに抗議するデモが相当派手に行なわれましたネ。過激派学生の行動にはだいぶ批難の声が上がったけど、針子も警官を焼き殺した事件にはビックリノとても正気の沙汰とは思えないナ。▼それにつけても平和な我が阿倍野高校この伝統を守っている〝他のどんな動きにも動じない、冷静かつ沈着な〟阿倍高生は高く評価されるべきでしょう▼議会に顧問が出席しなかったことがどうのこうのと言う「革新」が配られてましたネ。針子もあのビラで始めて議会のことを知ったんだけど、校内の者より校外の者の方が学校内のことにさわぐのも阿倍高の特徴ですナ。▼阿倍高の特徴といえば、この間（二カ月程前）の朝会で校長先生がおっしゃいました。「阿倍野高校は創立以来、質実剛健をモットーとしている」と。▼〝質実〟質素倹約を常とするそうですが、それで学校の設備が悪いのかナ。▼〝剛健〟創立時は女学校だったはず、女子に剛健とは？女生徒のみなさん、髪でも刈り上げて「女らしき」から「剛健」に乗り換えては……。▼では、よいお年を。　針子

孤独

巌や樹に住む
あらたかなるニンフらよ
おのおのが
心ひそかに求むるものを
あたえたまえ

かなしむものになぐさめを
まよえるものにみちびきを
また　恋するものには幸を
あたえたまえ
神々は　人に拒みしものを
おん身らに
あたえたましいにはあらずや
おん身らを
信ずるものに
なべてなぐさめと
たすけとをあたえんとする
その力をは

ゲーテ

部説
生徒の自治を考える

現在本校における、「生徒の自治」は、どのような状態だろうか。日々のHR活動、あるいはクラブ活動等で、教師と接触して身動きがとれなくなったことが、あるだろう。そんな時こんな疑問が頭をよぎったことはないだろうか。「なぜ、こんなにまで、教師が生徒に干渉し、助言を越えた発言をするのだろう。」しかし、ここで問題なのは、助言を越えた発言という言葉の意味である。教師は生徒にただ授業をするだけでよいというなら、そういう事も言えるかもしれないが、決して私達はそういう事を望んではいないはずだ。例え教師が自分の考えを押しつけてもその時点で私達はどうしているだろう。こういう事が起こっても、生徒がそれを必ずしも深く考えるという所までもっていかない。そしてうやむやにしている場合が多い。我々は校内の様々な事について、決して「見ざる・聞かざる・言わざる」になってはならない。本来自分自身の手でできる事が慣習のため、良いとも悪いとも判断の対象とならず置きざりにされてはいないだろうか。それは自分で自ら自治を侵している事にならないだろうか。そういう事に、もっと光を当て、見入るべきである。それでいて、相手の声にも耳を傾け、そして言うべき事は言おう。

次に、「生徒の自主的精神に基づく組織」である自治会は、どう考えられているだろうか。そしてその基礎単位であるHRはどうだろう。自治会は、いつの間にか、役員改選の際には、立候補者の出にくい状態になりがちである。それに、週一時間のHRは、生徒の民主的かつ自発的、自主的な発言の場ではなくなってきている。自治会がなぜ名目にかかわらず、魅力を失ってきているのだろう。それは「生徒自身の自治組織」であるという事を忘れられているからだ。自治会は、自治会の基礎単位とも言うべきHRやクラブの調整機関にされているのが実状だ。こんな状態では、いつまでたっても自治会の地位は向上しない。そのためにも、生徒はもっと自治意識に目覚めるべきなのである。HRにしても沈黙しただ一度手を上げているという現状である。だからもっと自発的に行動すべきなのである。さてここで注意したいのは、先ほど書いた、その際の「教師の適当な助言と指導」である。これは、慎重にも慎重を重ねられるべきで、一言で生徒が沈黙してしまうような押えつけのようなものであってはならないと思う。

今まで「生徒の自治」を主にHRや自治会において考えてきた。しかしこの問題は、学習にもかかわってくるのではないか学習面でも生徒の主体性回復のための活動を活発にしなければならないのではないかと思う。

又、我々が、「自治」を叫んで行動する時、そこには絶えず責任というものがつきまとっているという事にも、留意しなければならない。

▽　▽　▽

家庭クラブ総会
アッという間に終わる

去る十一月二十日（土）、十二時三十分より、講堂において、家庭クラブ秋季総会が開かれた。今会は昨年に比べ、出席率は良く、八十三％だった。

まず場内がざわめく内に、前会長の岡千寿子さんの開会の辞で始まり、次に全員で、家庭クラブの歌（その一）を歌った。その後、校長・顧問のあいさつが予定されていたが、時間の関係で省略された。続いて会計・議事報告の後、役員の立ち会い演説会が、始められた。演説は、一人二分以内にまとめるように言われていたそうだが、実際は一分以内に終わった人が多く、各人の家庭クラブに対する主義主張の特色が、はっきり出されていないという印象だった。しかし、それぞれの候補者には、それなりの熱心さが見られた。又ある候補者には、会場から呼び声が飛んだりした。

その後、家庭クラブの歌（その二）を歌い、前副会長の山本恭子さんの閉会の辞により、わずか三十分程で終わった。この様にごく短時間で終わったのは、個人個人の用事を束縛しない様にとの配慮からだった。

なお、投票の結果、新役員は次のように決定した。

会　長　神宮司由紀（二―八）
副会長　蒲田　千枝（一―七）
書　記　光吉由美子（一―八）
岡部真由美（一―一）
会　計　綿野裕美子（二―五）
大塚　公子（一―七）

◇会長のことば◇

新期にあたり、私はまず家庭クラブは皆のクラブであるということを言っておきたいと思います。現状から見れば、各々が自分で選んだ自治会のクラブと違って、家庭クラブは一人一人のものとなりきっていないし、又、会員の家庭クラブ員としての自覚が足りないとも思います。女生徒としての特性を活かし、女子相互の連帯感を高める為のこの家庭クラブ活動でありますが、ややもすれば、入部が強制的とも見られたり、あるいは反撥すら感じていらっしゃる人もあるかも知れません。けれど、今一度考え直してみて下さい。家庭クラブは、家族の価値ある一員となる重要さを強調することや、家庭生活を明るい民主的なものに発展させること、家庭生活や社会生活に創造力を発達させ、その改善をはかること等を目的とし、全員でそれらを行動にうつし、実践していこうとしているのです。皆さんの一人一人に、私達女性の生涯の目的であり、糧であるものに興味を持ち、それを求める探究心と、限りない愛着とを持って、家庭クラブに接していただきたいと思います。私達会員の心が一つになって、努力していかなければ、

思い出多き信州 25期生

目をみはった穂高連峰

去る十月五日（火）から十月九日（土）まで二班に分けて、第二十五期生による修学旅行が行なわれた。コースは、A班は、大阪駅から列車で長野まで行き、そこからバスで志賀高原中軽井沢、蓼科、松本、上高地へと周り、五日の行程を終え、高山から列車で大阪駅へと帰った。B班は、A班の逆のコースを取り、高山から長野へと行った。三日目の昼、A班とB班が出会い、そこで合同フォークダンスを催して再会を楽しんだ。天気も上々で、信濃路の秋を十分に満喫して無事旅行を終了した。

りんご両手に

A班　新大阪―長野―須坂―丸池（泊）―白根火山―草津

第一、二日目（五・六日）

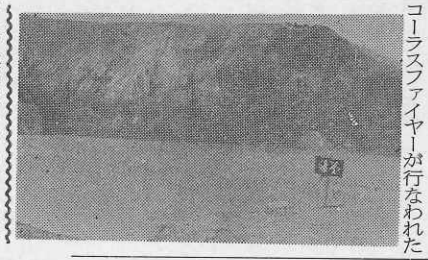
須坂でのりんご狩り（約一時間）は、入口でアルミの皮むきと袋をくれた。持ち出せるりんごは、袋に三個と両手に一個ずつの計五個だったので、みんな食べられるだけ食べていたようである。

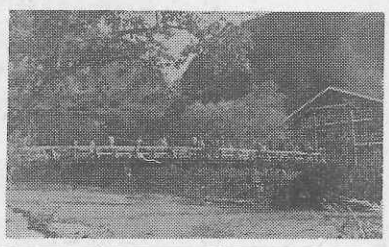
また、ある人は家への土産と、二十数個も持ち出していた。

B班　白根火山―丸池（泊）―須坂―長野―大阪

第四、五日目（八・九日）

鬼押し出し園からバスで硫黄のにおいのたちこめる白根山火口へ着いた。石のごろごろした斜面を10分程登ると頂上。眼下には、火口湖が広がっており、湖の所まで降りていく者もいた。そしてバスは志賀高原へと向かった。その晩コーラスファイヤーが行なわれた。上高地では、あまりの寒さで荷物を持っていた手がしびれるほどだった。翌朝、眼前で見たかっぱ橋、穂高、梓川は今までに見聞きしたよりも美しく調和のとれた風景だった。ただ、大正池を散策できなかったのが心残りだった。





穂高が魅了

A班　新島々―高地（泊）―平湯峠―高山―大阪

第四・五日目（八・九日）

A班は、最終日に上高地に着いた。大正池の手前から約一キロを歩いて五千尺ロッジへ向かった。途中の景色は、すばらしく言葉では言い表わせないほどであった。

夜、我々は合同のコーラスファイヤーを行なった。気温が下がり体が凍えるような感じであった。しかし、各クラスいろいろな出し物を考え、おもしろおかしく過ごし、修学旅行最後の時を過ごしたのである。

B班　大阪―高山―平湯峠―上高地（泊）―新島々

第一、二日目（五、六日）

大阪を離れて、待望の信州に着

雄大な浅間山

A班　鬼押し出し―中軽井沢（泊）―小諸（懐古園）

第二、三日目（六、七日）

懐古園では自由時間は40分余りしかなく、千曲川の見えるダムまでは行くことが出来ず残念だった。二の丸跡の石段をのぼると、そこにはひなびた土産物屋があった前の、しゃくなげが咲いている花壇には、花に埋まるように碑があり牧水の歌が刻んであった。

かたわらに秋草の花語るらむ
滅びしものは懐しきかな

B班　小諸―中軽井沢（泊）―鬼押し―草津

第三、四日目（七、八日）

八日は、天気も上々でこの旅行の最高のコースであった。鬼押し出しに向う途中、左にでんと腰を据えていた浅間山の雄大さにみんな自を見はった。一方浅間の麓の鬼押し出しは、みんなを異様な世界へと誘った。この日は、カメラのシャッターを切るのに忙しそうだった。

劇的な再会

A班　白樺湖―車山登山―霧ケ峰―蓼科（泊）―松本

第三、四日目（七、八日）

白樺湖は、A・B両班の劇的な（？）出合いの場となり、多くのアベックが湖畔の散歩を楽しんでいた。また、合同フォークダンスもなかなか楽しい雰囲気を作り出していた。

車山は、頂上に着いたとたんに霧に包まれてしまい、すばらしい景色も見られずに下山となった。

B班　松本―茅野―蓼科（泊）―霧ケ峰―白樺湖

第二、三日目（六、七日）

晴れた空に松本城がくっきり浮かんでいた。一目見た時小さくて貧弱だなと思ったが、なんとなく見ている間に形の整った美しい城だなと思うようになっていた。城の中にある階段は急勾配で、登るのがこわかった。城の前には、きれいな庭園があり、昔の面影が忍ばれた一日だった。

☆　☆

修学旅行 こぼれ話

☆真夜中の電話

どこの旅館の部屋にも電話がとりつけられていたが、男子の部屋から女子の部屋へ、愛しい（？）人の声を聞こうといたずら電話が殺到あまりのしつこさに女子もプンプン。あげくの果てには、先生の部屋にまちがってかける始末。そこで考えた男子、「えー、○○だが△子さんはいないかね。」と先生を装って電話。

☆ロマンチックなムード？

A班とB班の再会の地である白樺湖では、二つの班に分かれてしまい、二日間会えなかったことも手伝って、アベックがうじょうじょ。湖と紅葉した白樺をバックにロマンチックなムード（？）だったがやめにとっては目の毒。曰く、「フォークダンスなど、何なとやってくれ。」

☆若いんだもん

B班の四日目の夜、或る女子達は、枕とかけぶとんを抱いて、友達の部屋へこそこそと合流。そこで笑ったり泣いたり、夜中の三時過ぎまで目をこすりとすり起きていた。あくる日は起床時間が六時半だと言うのに、と思いきや、意外や意外、皆んなぱっと目ざめて曰く、「若いんだもん。」

☆私にも踊れます

B班、二日目の蓼科の塩壷温泉で同泊した、四国の今治工業高校の生徒とゴーゴーを踊った。両校とも踊ることは予定されていなかったが、両校の先生方が、「修学旅行だし、若いんだから、ひとつ許しては。」と話し合いをしてお互いの高校の先生たちからの、踊ってもよろしいというお達っし、今まで隠れて小さくなって踊っていたが、そうと分ると、みんなのびのびと、心ゆくまでゴーゴーを楽しんだ。先生もいっしょになって踊られた。阿倍高の梁先生曰く、「私にも踊れます。」

☆恐れ入りました

ホテルニュー志賀の夕食に、何やら奇妙な味の天ぷらが……。一見さつまいもにも見えるのだが、食べてみると、すっぱいの何の。皆んな「何やろ、これ？」と不思議そうな顔。後で聞くと何と〝りんご〟の天ぷらだそうだ。さすがぁー、長野県。恐れ入りました。

反省会　班内の親睦だけ

今年の修学旅行も、たいして大きな事故もなく無事終了した。そこで、修学旅行委員が今後の修学旅行の参考になればという主旨のもとでまとめた反省をここに載せた。生徒の生の声を聞いてみよう

Ⅰ、コース・見学地について

①コース・見学地は全体として良かった。

②バスの乗車時間が多過ぎた。又、見学地での自由時間が少なかった。

Ⅱ、宿舎について

①予算を考慮に入れれば適当であった。

②寝具が十分でなく、又暖房設備についても問題があった。

③部屋割りについてもう少し配慮してほしかった。（人数）

④昼食が不満足であった。

Ⅲ、諸行事について

①A班のフォークダンスは良かったが、キャンプファイヤーは寒かったし、準備不足のためかまとまりがなかった。

②B班のキャンドルサービスは運営上の不手際のためか、盛り上がりがなかった。

③合同フォークダンスは、十分に満足できなかった。（時間・場所・参加状態）

Ⅳ、修学旅行の目的が達せられたか

①小グループや班としての親睦は得られたと思うが、クラス全体としては、班に比べて十分に得られなかったクラスが多かった。

②教師と生徒の疎通は得られなかった。

③学年全体としては、学年がA班とB班に分かれて行動したため、目的は得られなかった

Ⅴ、その他（希望）

①目的と考慮に入れるならば、ベースキャンプ方式のように宿泊時間が十分とれるようなやり方がよい。

②学年全体として行きたかった

◇　◇　◇

来年度は九州へ！

さて、来年度の修学旅行の行程は次のとおりです。

▽第一日
大阪―（車中泊）―長崎

▽第二日
長崎―雲仙―島原（泊）

▽第三日
島原―天草松島―天草五橋―三角―熊本―阿蘇山―草千里―赤水（泊）

▽第四日
赤水―（クラス単位の行動）―別府（泊）

▽第五日
別府―神戸―学校

＝スポット＝朝会を生徒の手で！

朝会は月二回第二、四月曜日に行なっているこの日は生徒にとってゆううつな日、もしも雨が降ろうものならみんな大喜び これは生徒のみなさんが一番よく御存じのはず……。

朝礼台の上から「早く集まれ」という先生の声がマイクを通って伝わってくる。すると、校舎からゾロゾロと生徒が出て来る。あるいは校門から息せき切って。なんとか運動場へ集合した時は、もう八時半近い、この時間は冬になると、ますます遅くなる。ここから朝会が始まり校長先生の話や生活指導の先生の話、委員会からの報告と続く。話が長くなるたびに生徒の雑談は多くなる。これは先生方がよく御存じのはず。はたして何人が先生の話を真面目に聞いているだろうかそこに朝会があるから参加する―参加しなければならないから。小学校から今日に至るまで、私達は朝会をやってきている訳だが、「朝会なんか先生に勝手にしゃべらしておけばいいのだ」と言う人が多いのではないだろうか。

さて、朝会の意義とは何だろう先生に聞くと、校長先生の話等を聞いて、学生生活の参考にする。また、日頃接触の少ない校長と顔を会わす。学校生活の良い点、悪い点の注意。表彰。教師と生徒の間に親近感を持たせる。生徒間の連帯。集団としての訓練等と言うことである。

では、これらの意義はどれほど実践されているだろうか。校長先生の話を聞くにしても、生活指導の先生の話を聞くにしても、生徒にその気がなければお話にならない。校長と顔を会わすと言うのなら、自習時間にでも校長が見に来てくれる方がずっと親しみがわく教師と生徒の親近感―千人余りの人数が集まっても、肩で触れ合うのは担任に名前を呼ばれ「ハイ」と返事をする時だけである。これでは授業時間と同じである。各人の教科担任以外の先生と顔を合わせることができるのも最前列の数十人だけである。一カ月に二回でも、全校一斉に並べば集団としての訓練はつくが、連帯感はどうだろうか。自分の前の人を探してその後に並んで、自分の位置を確保する。隣にはベチャクチャしゃべっている人や、ボケーッとしている人がいるけど、自分には関係ない。「隣は何をする人ぞ」的な雰囲気である。これでは連帯感は生まれない。以上のことからも分かるように、現在の朝会ではほとんど意義が達せられていない。意義が失なわれていても朝会をしないよりはましである」これでは、消極的過ぎる。意義が全部実践されていなければならないのである。

様々なことが交り合って、今やこのような集会が行なわれている朝会に参加する人数は、教師六十余人に対して生徒二千余人、それなのに朝会を運営しているのは、先生である。今の状態は、先生からの一方的な押しつけで、生徒は真に参加していない。朝会で行なわれることは先生によって決められているので、生徒の意見が反映しにくい。つまり、生徒不在の朝会である。一方世間では「国民不在」という言葉が最近よく使われるが、政治は「人民の、人民による、人民のための政治」が本来の姿である。同様に朝会の姿も、「生徒の、生徒による、生徒のための朝会」であるべきではないだろうか。

今の朝会は、先生の朝礼台からの言葉は絶対的な物に生徒には受け取られている。しかし、それは先生達の考えであって、本来は助言という形のものではずである。政府は国民の代表だが、教師は生徒の代表ではない。生徒の朝会は生徒によって運営されるべきものである。だからといって教師を疎外してよいものではない。生徒中心にして、生徒と教師が共に創ってゆくことが望ましい。

朝会が生徒の手に渡り、そのことにより生徒の自主活動に対する関心が深まったなら、これほど良いことはない。それには、自治会等の努力が必要ではあるが。（もちろん生徒自身の自覚も）今こそ朝会を考えなおすべきではないだろうか。

……「高にいる時だけやめろ。」などと言われたのでは教師を信頼などできない。しかるだけが教師の態度は明らかに生徒の自主性を無視し、そして生徒を全く信用していないことの表われだと考えます。そして、ここには生徒をよりよい方向に導いてゆこうという教育姿勢が感じられません。そしてこれは教師への不信に導き、教育の反動化につながるものではないでしょうか。何故なら、このような歪曲された指導は生徒に一方的な思想をおしつけれと思うからです。

このようなことから本来、敵であってはいけない筈の教師が現在の私には当面の敵として存在しています。ここで本来敵であってはいけないと述べたのは、この両者は教育の反動化に共に闘ってゆかねばならないからです。蛇足であるとは思いますが教育の反動化は教科書のうつりかわりを見ると明らかに表われています。

いろいろ述べましたが、教師と生徒は話し合えばうまくゆくと考えている人は今一度考えてほしいと思います。

× × ×

新聞部では、皆さんの意見を広く募集しています。

〈投稿〉教師と生徒の関係

二年五組　金森圭子

最も基本的な関係として両者は対等にあるべきだと考えます。そうでないと一方の基本的人権が冒されるという危惧があるからです そしてこの基本的人権の一例として阿倍高では〝表現の自由〟ということが問題になっています。例えば、現在阿倍高にある許可制を見ればそれは表われていると思います。学校側の出した許可条件はあたかも当然のように思えます。しかし、暴力的なもの、事実に反しているものといっても、それは個人の思想によってかわってくると思います。だからそこに当然のこととして筆者と許可を与える者との間に考えの相違が出てきます そして最終的には許可を与える者即ち教師の判断によって全てが決まってしまうのです。これは明らかに教師は正しい絶対的なものとしているように思えます。そしてここでは生徒の主体性は踏みにじられていると思います。

しかし、このような許可条件を正しく判断できる人間がいるのでしょうか。やはり思想、考えが異なる場合、最終的には自分で判断するしかないのではないでしょうか。そして、そうすることが真の表現の自由だと考えます。

又、学校側は人権を擁護するためだというが、それならば何故、昨年の「暴力事件」に対してあのような処置しかとらなかったのでしょうか。ビラを配布した生徒が一部の生徒から学校の風紀が乱れるという理由で暴行されたというこの事件に対し、結局学校は暴力をふるった生徒を一日停学にしただけです。又、この生徒は全く反省していないような発言をつづけました。このように現象面だけとらえた対処の仕方に私は学校側に疑問を感ずにはいられません。このようなことが起これば学校側のいう人権の擁護も単なる言葉の羅列にすぎないと思うのです。

このようなことから許可制の本質は教師を絶対化してしまい、又学校を統制しやすくするためのものだと考えます。そしてそこからは、学校側に従順、もっといえば現体制に従順に従える人間をつくり出しているように思います。もはや、ここには教師と生徒は対等の関係にあるなどとはいえません

又、自分の意見を主張しただけでも教師に呼び出されたりしていたら、私としては教師不信にならざるを得ないと考えます。例えば制服の自由化をどう思うかという質問に対し賛成の方に手をあげるだけで呼び出されて説教されたり集会やデモに参加したら「女子はそんなことをやめろ。」とか「阿倍

中原先生の ニューギニア敗戦記

広島陸軍病院物語

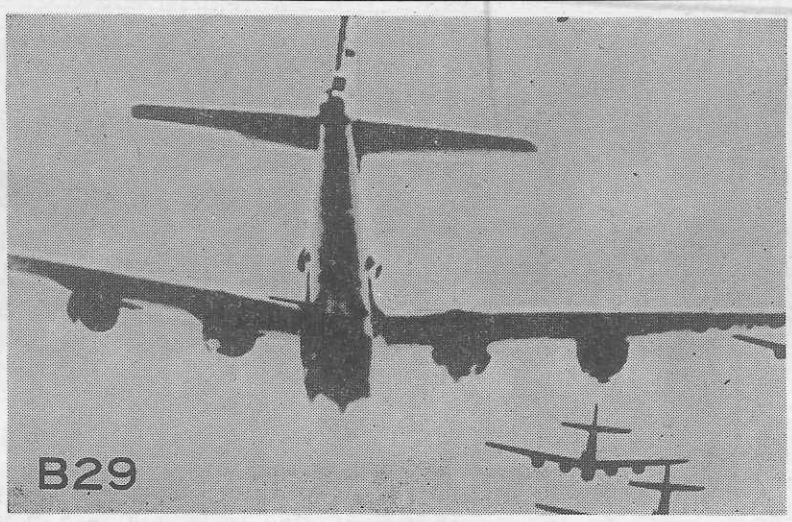
前回のあらまし

太平洋戦争開戦と同時に一兵士として召集された私は、東南アジア各地を転戦。いつの間にかニューギニアにまで進出していた。戦局はいよいよ苛烈を加え、わが広島第五師団はさらに南のかた、アララフラ海のまっただ中、ケイ諸島に展開することになった。オーストラリア大陸はもう目と鼻の先の距離である。

× × ×

我々が運命をたくした一隻の機帆船は夜陰に乗じて船出した。行く手ははるかアララフラ海。生か死か神のみぞ知る。このあたりの海は天然真珠の宝庫とか。星空に妖しく輝く南十字星、神秘的なマゼラン星雲をたよりに南半球を一路南下する。いつ現われるかも知れない敵機。シュルシュルと不気味な音をたてながら、波間から襲いかかってくる魚雷に、我々は全神経をとがらせつつ夜のアララフラ海をひたすら進む。

幸い神の加護によって、どうにか無事にケイ諸島の海岸にたどり着くことができた。上陸早々、敵上陸に備えて陣地構築に取りかからねばならない。ところがこの群島一帯は、地球の誕生いらい中世代あたりから何億年もかかってサンゴ虫がせっせと作りあげたサンゴ礁だけに、地殼がものすごく固い。ダンプもブルドーザもない日本軍は、血と涙の汗を流しながらこの難工事に取り組まねばならなかった。



それに食糧がだんだんと欠乏してきた。今ではもう米粒が数えられる位にまでなってしまった。

米・豪連合軍は早くも我々の上陸を察したらしい。ちょっとでも炊事の煙をあげようものなら、どこから現われるのか、たちまち機関銃掃射の雨である。

今ではもう戦争どころか、日々の食物さがしが一番緊急の仕事となってしまった。鰐・トカゲ・蛇・ねずみ・昆虫類など、食べられるものは何でも口にした。被服はボロボロになり、ひげは生え放題ほとんどの者は裸足で、全身は皮膚病だらけ。原住民のメラネシヤ人とほとんど区分がつかないようになってしまった。これがかつて精鋭をうたわれた日本軍の姿だろうか。敗戦のきざしはすでに徐々に表われていたのである。

さらにもう一つの恐しい見えざる敵がひそかに日本軍に忍びよっていた。それはマラリア・デング熱といった悪性熱帯病である。体力の限界をこえた重労働と栄養失調、それに熱病が重なり合って、兵隊達はつぎからつぎへバタバタと倒れて行った。

こうして私もある日突然に四二度もの高熱を発し、目まいがしてきて意識を失なってしまった。何日ぐらい経ったであろうか、ふと気がついてみると、野戦病院の粗末なアンペラの上に寝かされていた。

ふと尿意を催したので起き上がろうとしたら、これはまたどうしたことか？立てないのである。おかしいと思って何度もがいてみてもどうしても立ち上れないのである。

私は歩行不能になっていることにやっと気がついた。

永い間、人間の生存し得る極限の状態にまで追いこまれていたのだ。そのため私の身体の細胞組織は破壊しつくされ、歩行機能を失なっていたのだ。

いま、この時点で米・豪連合軍が上陸して来たら、戦力なき私は手榴弾で自決するより外はないであろう。もう一度なつかしい祖国に帰りたい。今ここで死んではならぬ。石にかじりついても生き抜かねばならぬ。目の前が急にまっくらになったような気がして、止めどなく涙が流れ落ちるのをどうすることもできなかった。

こうして糞便にまみれた苦闘生活が続くのである。

× × ×

幸いなことに南方戦線最終便の病院船に拾われて、原隊所在地の広島陸軍病院に還送されたのは、B29による東京大空襲の直前だった。

私にとって広島はかつて四年間の学生生活を送ったなつかしい思い出の土地である。友人・知己も多い。病院も比較的に施設が完備しており、私は戦列復帰を目指して、ひたすら療養に専念した。杖をたよりにではあるがどうにか歩けるまでに回復したのもこの頃のことである。

太平洋戦争は次第に敗戦の様相を示しはじめてきた。東京・大阪名古屋等の大都市はもちろん中小都市までがB29の焦土作戦によって灰じんに帰していった。

戦後の資料によると、アメリカ戦略空軍は始め高々度精密爆撃を実施して来たが、思ったほど効果が上らないので司令官を解任し、新任カーチス・ルメー中将と交付する。と同時に今までの高々度爆撃を低空からの焼夷弾攻撃に切り換えたのである。もうこの頃の日本軍には迎撃できる局地戦闘機も有効射程の高射砲もなく、これが着々と効果をあげてきたのである

四月になると広島市からわずか四〇キロメートルほどしか離れていない呉軍港も真珠湾の敵討ちとばかり、B29グラマンF6F艦戦の大空襲を受け、残存の艦船群は海底艦隊となり果てた。

しかるにどういうわけか、広島は一向に爆撃されないのである。時々B29が単機または二機編隊で二二〇〇〇メートルの高々度からきれいな飛行雲をなびかせながら広島上空をゆうゆう偵察するのが認められた。原爆投下目標を選定していたのである。

開戦と同時にアメリカはマンハッタン計画の名のもとに原爆開発に着手した。研究は着々と進んで行き、一九四五年七月一六日ニューメキシコ州の砂漠アラモゴールドでついに原爆実験に成功した。つづいて七月二四日ポツダム会議でトルーマン大統領は日本の無条件降伏を要求、原爆使用を許可した。

極秘のうちに攻撃都市は広島・長崎・小倉の中の二都市と定められ、このU235の原子爆弾の部品は中部太平洋マリアナ諸島のテニアンに運ばれ、七月二九日から八月二日までに到着していた。

太平洋戦争もいよいよ末期的症状を示してきた。誰の目にも、もはや敗戦は明らかである。広島陸軍病院も入院患者その他を疎開することになり、私はなつかしい広島に断ちがたい未練を残しながら日本海に面した分院へと送られた。あの原爆投下の日八月六日の一週間前のことである。

ついに八月六日がやって来た。その日の早朝午前1時45分、三機のB29気象観測機が飛び立って、広島・長崎・小倉の三つの目標都市に向った。かれらの報告でどの都市を攻撃するかを決定するのである。

午前2時45分チベッツ大佐を機長とするB29原爆搭載機「エノラ・ゲイ」号が滑走路を滑りだしたチベッツ大佐は気象観測機からの報告を待っていたが、やがて広島の天候良好との報告を入電し、ここに有史以来はじめての原爆攻撃の目標が決定されたのである。

原爆投下は、午前9時15分と定められていた。「エノラ・ゲイ」号は予定どおりに広島上空に到達し、爆弾倉は開かれて正確な定時に爆弾は投下された。パラシュートが開き、人類最初の原子爆弾はゆっくりと約八〇〇〇メートルの高度から、爆発中心点相生橋へ向かって落下していった。

原子の核反応は高熱の閃光とともにキノコ雲となり、一瞬のうちに何もかも焼きつくしてしまい、広島は廃墟となってしまった。住民の死傷実に十二万九千人という

広島陸軍病院は爆発中心点に近く、もちろん跡形もなかった。

おわり

著者紹介

一九一五年生まれ。広島高等師範学校数学科卒。一九四八年以来本校教諭。

御食事・御飲物・めん類ならなんでも

安くてうまい

校内食堂　みのわ

ぶじ一流企業に

就職者内定

本年度の就職者は、金融関係、生産関係を中心に、十月中はほぼ完了した。本年度はドルショックがあり、多くの求人取り消しがあったにもかかわらず本校は全員一流企業に内定した。本年度から調査書が社用紙から府下統一用紙となり、本人に無関係なことは書かなくてもよいことになり、本人重視となった。

高校の就職あっせんは今年度から十月一日以降となり、従来の八月一日開始より二カ月遅くなりました。三年生にとっての最後の夏休みを十分意義あるものに過ごすことが出来ようでした。

しかし、その間にドルショックで求人の申込みの取消しが生産会社の一部に見られ、一時はどうなることかと心配致しました。しかしながら生徒の着実な努力とよき先輩のおかげで、十月中に全員就職先が希望通り決定致しましてこの上なく嬉しく思います。

又今年からは就職書類が統一されまして、大阪府一斉の統一用紙を使用することになりました。従来の各会社から送られて来るまちまちの社用紙を使用する煩雑さも消滅し、自他共に就職事務も簡単になりました。

就職内定に関しましては全く本人の能力を中心に、採用条件にしばられることなく高校生活を充実しておれば大体内定にまでこぎつけることが出来たようで高校生活をゆがめることなくのびのびと進路決定が出来たことは誠に喜ばしいことです。主な求人先は、銀行・生命保険・商社、生産会社・その他で求人数は男子二〇五名、女子三八二名の多数でありました。

初任給は大体三万二千円から四万円位で企業による格差がだんだん少なくなっています。

就職内定者は次の通りです。

◉金融・保険

〔三和銀行〕
佐々木己智（一）
中島　優子（一）
北村真理子（三）

〔住友信託銀行〕
今田　優子（八）

〔日本生命〕
西口　明子（八）

◉商社

〔三菱商事KK〕
福山　智子（八）

◉生産

〔サントリーKK〕
藤井　邦子（八）

〔住友金属工業KK〕
高橋佐知子（八）

〔日本板硝子KK〕
吉井　絹子（八）

〔藤沢薬品工業KK〕
下川奈美路（八）

〔三越百貨店〕

山本　昌子（八）

〈以上　進路指導部より〉

今年の就職者にとって、大きな問題となったのは、やはりドルショックのことだろう。進路指導部の先生も書いておられるように、大手の求人取り消しもあったようだ。このことには、先生方も大へん心配されたことだろうと思う。しかし、我校は、名門校であり、伝統もあるという上に、生徒の努力が重なって、合格率はなんと百%。これは大へんすばらしいことだ。会社も見てもらってわかるように一流といえるようなところばかりで、一・二年生の中で「卒業したら進学せずに、就職しようか」と思っている人にはなんとも喜ばしい事実である。これは卒業生のみなさんが、職場で阿倍高の名前を汚さず、かえってみがきをかけていてくれるからだと思う。だから私達も、阿倍高生として、先輩たちがつくってくれた伝統（？）を汚さないようにしないと。

次に、みんなの気になる調査書については、社用紙がなくなり、府下統一になったということ。理由としては、まず、本人に関係のない家庭的なことで差別していたのをなくすということ。次に本人に不利なことは書かなくてもよいということ。これらは、良い傾向だとは思うが、本来なされていなければならないことであるはずだ。それなのに、去年まで実行されていなかったというのは企業に苦からの封建的かつ因習的ともいえる求人に対する固定概念がまつわりついていたからではないだろうか。ここにも採用にあたっての民主化のあらわれがうかがえる。

今年度の就職希望者はご覧のとおり11名である。（参考までに23回生は28名、22回生は30名）これは府下におけるどの高校にも、少なからず見うけられる「年々減少」の一途をたどっている。原因としては、進学者の増加があげられる。

最後に、就職する人にも、進学する人にも、自分なりの考えや、希望があると思う。だから、それに向かって、最善を尽くし、くいの残らないようにしてもらいたいまた、一、二年生の人も、今から自分自身の意志をもっておいても早すぎることはないと思う。はやく自分の進みたい道をみつけておくことだろう。

天王寺公園の北側に市立美術館というところがある。その西隣に「慶沢園」という静かで落ち着いた庭園があることをご存知だろうか。この庭園は、住友家から寄贈されたもので明治・大正年間に作られた数多い庭園の内でもすぐれたものである。慶沢園という名前は、もとは恵沢園といい、伏見宮貞愛親王から賜ったもので、これは、「照代の恩恵・祖先の金沢」という意味でいわれの深いものである。この庭園は、午前九時から午後四時まで開園されている。（但し月・火・木・土曜日は休園）中央に大きな池があり、回りには松やもみじが植わっている。

彼と彼女のロマンチックな語らいにもよし、自己を見つめるのもよし。入園料の二十円なんてなんのその。テストも終ったことだし若者らしく大いに戸外で語り合おうじゃないか。

Xマスアイデア

いよいよ待望の冬休み。クリスマス、忘年会の計画もたてていることでしょう。さて、クリスマスのためのプランを二、三考えてみました。

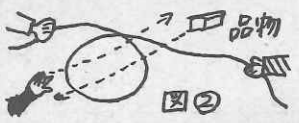
▼インテリア

スプレー式の白色塗料を窓に吹きつけ、雪のムードをつくります。マシュマロを天井からつりさげて雪の降っている感じを出してはどうでしょうか。何本も長いろうそくを部屋のまわりに飾ります。そしてテーブルのまん中に大きなガラス鉢を置き、まっかなカーネーションの花を水に浮かせます。配色を考えて、ひいらぎなども浮かせるのもよいでしょう。

▼ゲーム

①クツベラ、シャモジなど何でもいいから家にある小物を利用します。これらの品物を一人十個ぐらいの割合でセロテープを使って体のいたるところにくっつけます。このときに使用するセロテープの長さは品物一個につき十センチぐらいときめておきます。体に品物を付け終わったら「用意ドン！」の合図で体をゆすったりとんだりして片っぱしから落としていくのです。このときに手で品物をはがしたりしてはいけない等のルールを決めておきます。（図①）

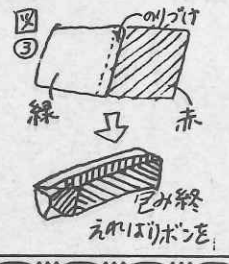
図①



図②

②ひもで手が通る程度の輪を作りひもの両端を目かくしをした二人で持って、別の一人がその輪を通して反対側に置いてある品物を取って来ます。このときにひもを持っている二人は相手が輪の中に手を通したと思われるときに二人が心を合わせてひもをひっぱり、相手に反対側の品物をとられないようにします。このとき獲得した品物は獲得した人のものとしてはどうでしょう。また品物を取る人が目かくしをして品物を取る等もおもしろいです。（図②）

図③



その他、プレゼントの交換なども金額を決めておいて、アミダくじでやるのもどうでしょう。どんな品物が当たるか楽しみです。

▼プレゼントのパッケージ

デパートの包装紙やありきたりの包装じゃ、イヤ！という方に二、三パッケージを考えてみました。

①つるつるの色紙を用いて、赤と緑、黄と紺などツートンカラーで包装紙を作ってみては？そして最後には白いリボンなど、包装紙との配色を考えてリボンを選び結べば出来あがり！（図③）

②箱が四角くて大きく、包装紙もあっさりしたものなら箱の側面の角にクリスマスカードなどをはり新鮮さを出します。（図④）

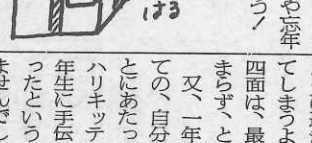
▼その他

クリスマスパーティーや、友だちをよんでホームパーティーをするときには、会費制にして、お菓子やジュースを買えば、経済的です。また、自分たちの家から、貝や、野菜や、肉などを持ちよってスキヤキなど、みんなで食べれて家の人の手を借りなくてすむ料理にするとよいでしょう。

また、多人数であり、「パーティをやる会場がなくて困った！」という方は、どこかの小さな喫茶店を借りることを提案します。たいていい、一日三千円～五千円で借りれるようです。少し、会費が高いようですが、人数をふやせばそれだけ、負担も少なくなります。エレキなどを持ちこんでやるのもおもしろいでしょう。

クリスマスカードですが、デパートなどで売っているのをみますと、カードを開くと手がとび出るなど、かなり立体的なものも出回っています。しかし、もっと、「厚みのあるやつを！」と思う方はフェルトなどを使って、お手製のものにすればいいでしょう。とくにこれは、手芸好きな女の子におすすめします。すでに市販のカードを買った方は、来年用に試してみては？

ちょったしたものを利用して、アイデアをプラスすればすてきなものになります。いろいろなアイデアで、楽しいクリスマスや忘年会、お正月を過ごしましょう！



図④

クラブ訪問

先生・生徒が一体に

河南高校部落問題研究部

去る11月27日（土）、我が新聞部員五名は、富田林の河南高校の部落問題研究部を訪れた。

クラブ創設が昭和43年12月5日というから、そんなに歴史は古くはない。部員数は23名で、女子の方が多いそうである。活動日は、月、水、金、土曜日で下校時刻の五時までに活動を終えるようにしているそうだ。クラブの予算は年間二万円で自治会の方から出され、部費は30円で、ときどき集めるとのこと。

さて、このクラブでは、未解放部落（以下部落と記す）に関する「学習活動」、「地域活動」「啓蒙活動」の三つを三本柱にして活動している。その中でも地域活動は活発に行なわれているようだ。二年前には和歌山県昨年は岡山県、今年は三重県の農村や漁村にある各部落に合宿をして、そこの部落の実態から学びとろうと調査し、部落の人たちとの交流ももって真剣に取りくんだ。

部落差別とともに他の不合理なことにも目をむけて、少しでも良い学園にしようという心意気が感じられた。

このクラブの創設にあたっては種々な困難があり、〝寝た子を起こすな〟という考えがあって反対もあったそうだ。

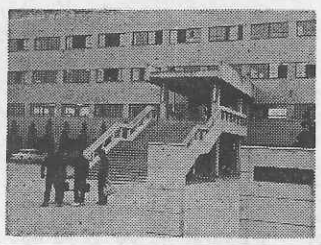
しかし、生徒が署名をとり、カンパも行なって、単なる興味からではなく、全国民の課題としての部落差別から逃避せずに積極的に取り組もうという態度や生徒の強い要望などで、創設のはこびとなったそうだ。そして現在、クラブ内だけの活動のみに終わらず、クラスにもちかえって意見等をきいて、皆ともに考えていっている。また先生方にも未熟な点を指導していただき、ともに考えていっている。

過去の活動の経歴をたどってみると、学校における部落問題の推進や、部落問題講座を開いたことがあげられる。また新入生に対して、部落問題に対する意識調査や、「人間みな兄弟」という映画を上映したりした。

「啓蒙活動」とも関連して、「部落と70年安保」の講座を開いたまた「全国高校生部落研代表者会議」にも大阪代表として参加するなど、かなり活発に運動してきている。そして活動のまとめとして、毎年「きずな」という機関誌を発行している。がりがりできたその小さな本「きずな」には、部落の人たちの生活や、差別の実態、話、考えも記されており、その中で、部落問題だけでなく、社会をみつめる部員の姿がうかがわれて、考えさせるとてもすばらしい機関誌であった。

今後の目標として、初めに述べた三本柱を中心に活動してゆき『部落問題そのもの自身を切り離して考えず、自治会活動やクラブ、H・Rの問題として進めてゆき、自主性を磨きあげて民主的な学園にしていくことを目ざしていく』（「きずな」より引用）そうだ。

我々は、一時間半ほど、部室のかわりである生物室で話を聞き、学校の様子も聞いて、のどかな田園の中に建った、近代的で、民主的な感じのする校舎をあとにした。



編輯後記

今回の新聞は、修学旅行関係の記事が載っている二面以外は、すべて一年生が各面の責任者にあたりました。そのため、仕事も思うように進まず、気ばかりがあせってしまうような状態でした。特に四面は、最後まで載せる記事が決まらず、とても頭を悩ませました

又、一年生部員は、みんな初めての、自分たち自身がいろんなことにあたってつくる新聞なのど、ハリキッテいたのですが、結局二年生に手伝ってもらったため、やったという実感があまりわいてきませんでした。次号は、納得のいく新聞にしたいと思います。

天野
安くて
おいしい！
南海上町線
松虫
阪南松竹
N
お好み焼き・焼きソバ

文房具なら
苗代文具店
N
阿倍野高校
南大阪幼稚園
苗代小学校
安くて
よい品！